

# みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

生き方から考える資本主義＜共同研究：  
グローバル資本主義における多様な論理の接合：  
学際的アプローチ＞

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2025-10-17 キーワード: 作成者: 中川, 理 メールアドレス: 所属: 国立民族学博物館
URL	<a href="https://doi.org/10.15021/0002000354">https://doi.org/10.15021/0002000354</a>

# 生き方から考える資本主義

中川 理

## 生き方の問題としての資本主義

狭い意味での「経済」の問題としてではなく、人びとの生き方の問題として資本主義をとらえなおすには、どうすればよいだろう。一方で、資本主義という言葉はものものしく、経済の専門家だけが語ることを許されているように思える。他方で、何なのかはつきりと分からなくても、資本主義は私たちみんなの生き方に深くかかわっているように感じられる。では、2つ目の直感にしたがって考えを進めるには、どのような道筋をたどればよいだろうか。そして、人類学・地理学・社会学が理解のために役立つとすれば、どのような点においてだろうか。これらの問いが、この共同研究会の動機となっている。

## 資本主義を脱中心化する

1つの手がかりは、資本主義が自分では作り出せない要素に依存しているという点に注目してみることだ。近年の研究の多くが、この点を出発点としている。とりあえず、賃金労働を用いた資本蓄積の追求として、資本主義をとらえてみよう。すると、それが単独では維持できないことに気づくだろう。たとえば、商品を生産するには労働者が必要だ。しかし、労働者は資本主義のなかで作ることはできない。家族やコミュニティの人びとが育ててくれるおかげで、人は労働できるようになる。つまり、資本主義は家族やコミュニティ（なかでも女性たち）の见えないはたらきに依存している。

同じことは、動植物についてもいえる。資本主義は動植物のはたらき（たとえば消化作用や光合成）を作りだすことができないが、それらの力を利用して牛乳や穀物を商品化してきた。さらに、地下資源もそうだ。ほとんどの商品を作るのに化石燃料が必要だが、自然の力に頼らずにそれらを生み出すことはできない。社会的再生産 (social reproduction)、資本新世 (capitalocene)、採掘主義 (extractivism) といった概念を用いた研究はそれぞれ、資本主義と家族・動植物・地下資源との関係が互いに似ていることを示している。いずれの場合でも、非資本主義的なはたらきと結びつき、その力を利用することなしには、資本主義は不可能なのだ。

しかも、結びつきの状況は、グローバル化の結果として増えている。いまや商品の生産は1つの会社の1つの工場で完結することはなく、何重もの下請けやアウトソーシングをと

おして世界各地へと広がっている。たとえば、インドのコールセンターでは、現地出身の労働者が英語で欧米の顧客をケアしている。また、アフリカ諸国では、現地社会から切り離された場所で外国資本が地下資源（石油、ガス、鉱物）の採掘を行っている。南米からきた移民労働者は、自分の子供を故郷の家族に預けて、ヨーロッパの豊かな共働き家庭で家事労働をしている。ネットワークが長くなり私たちの目につきにくくなっているものの、世界各地に散らばった依存の関係が資本主義を支えている。

ここから、「経済」中心ではなく、「脱中心化」したやり方で資本主義を考えることができるようになる。家族やコミュニティ、動植物や地下資源への依存から考えはじめることは、資本主義の理解にとって些末ではなく、むしろ本質的に重要だといえる。ただし、ここで注意すべきことがある。ここまで書いたようなとらえ方は、資本主義が持続していくために一方的に利用され収奪される存在として、人びとや自然を描いてしまう傾向がある。しかし、それだけなのだろうか。人びとも自然も受動的に利用されるだけの存在ではなく、それぞれ能動的な「活動する力」をもっている。しかも、力の向かう方向（人の場合であれば、どのような生き方を望むか）は、環境によって異なっている。だとすると、収奪を前提とするのではなく、人びとや自然と資本主義との出会いがどのような結果をもたらすかを、前もって答えが分からない、開かれた問いとして考えていく必要がある。そのうえで、人びとの願望や自然の力を、どのように資本主義が利益へと変換していくのかを、具体的な場面において理解しなくてはならない。

## 情動・物質性・批判

このような筋道をたどることで、私たちは生き方の問題として、そして民族誌的に検討可能な問いとして、資本主義をとらえなおすことができる。この共同研究会では、以上のようにまとめられる共同の理論的枠組に基づいて、それぞれが事例を検討するとともに、互いに比較を行った。そこからは、情動・物質性・批判という3つの主題が浮かび上がってくる。本共同研究会のメンバーによるいくつかの事例をとおして、それぞれの主題についてみてみよう。

資本主義は、人びとの情動を取り込むことによって成り立っている。松村圭一郎は、エチオピア女性の中東諸国での出

## 中川 理（なかがわ おさむ）

国立民族学博物館グローバル現象研究部准教授。専門は経済人類学、グローバリゼーション研究、フランス研究。共編著に『かかわりあいの人類学』（大阪大学出版会 2022年）、『移動する人々—多様性から考える』（晃洋書房 2019年）などがある。



中東湾岸の出稼ぎ先でキリスト教徒の祝祭日に集まるエチオピア正教徒たち（2024年12月、アラブ首長国連邦、松村圭一郎撮影）

稼ぎ家事労働が、女性たちの希望の受け皿となっていることを示している。たとえ危険があったとしても、出稼ぎは農村のきつい仕事から逃れて自分の手でお金を稼ぎ、より自立した生き方をするための手段として、女性たちに評価されている。松村の事例に限らず、自由な生き方に対する願望は、しばしば資本主義にかかわる動機づけを生み出している。また、情動の取り込みは、動植物についても考えることができる。動植物も独自の「活動する力」をもった存在であり、したがって人間が一方的にはたらかせることはできず、はたらいてもらえるように動植物と交渉しなくてはならない。筆者の事例では、「疲れて」いたり「苦しんで」いたりするズッキーニを気づかいながら、フランスの農民たちは生産を行っている。これらの事例からは、一方的な収奪に還元できない、人びとの願望や自然の力と資本の論理のあいだの複雑な関係性が見えてくる。

同時に、資本主義と人びとの出会いが生まれるためには、物質的な基盤がなくてはならないことも、本共同研究会の多くの事例が示している。たとえばフランスの農業の場合、生産から消費までを結ぶ、市場や輸送のサプライ・チェーンがなければ、農民や野菜は資本主義と出会うことはない。北川眞也は、このような物質的基盤を、ロジスティクスという用語でとらえている。ロジスティクスは、採掘の場にはじまる流通網を、最適化したやり方で結びつける。標準化されたコンテナを用いた輸送は、その象徴的な存在である。しかし、ロジスティクス最適化への要求は、ロジスティクスを構成するインフラを封鎖したり、別のインフラを構築したりする対抗的な運動（対抗ロジスティクス）を生み出すという。この方向性とは反対に、小川さやかは事例は、タンザニアのインフォーマル経済が、物理的な市場で行われるものからデジタル・プラットフォームを使ったものへと移行するにつれて、



ズッキーニを収穫するモン農民。ラオスの少数民族であるモンは、難民としてフランスに定住し、一部が農民となった（2023年10月、フランス、筆者撮影）

敵対性を失いつつあることを示している。かつては暴動や抵抗によって自己主張をしていた商人たちは、プラットフォーム企業の戦略に取り込まれているとみることができる。これらの場面には、どのような結びつきを望むのかをめぐるコンフリクトが存在している。

事例研究をとおして、人びとや自然と資本主義がどのように結びついているのかについて、より地に足のついたやり方で理解しようとする。そして、多くの事例の比較検討によって、複雑性や多様性を組み込んだ理論的一般化を少しずつ進めていく。このような研究の方向性を明確にできたことが、共同研究会の1つの成果である。しかし、批判という主題については、まだ考えるべきことが残っている。民族誌的記述が批判を欠いた現状肯定にもならず、批判が民族誌的記述を無視した抽象的な議論にもならないようにするには、どのような視点が必要だろうか。この共同研究会の延長線上で、さらに考えていかななくてはならない。